

## カオスなコラム 2 1 @白井京月

<http://d.hatena.ne.jp/rk0520/>

2013-05-28 - 2013-09-02

## 2013-05-28 カオスなコラム 2 1

### はじめに

カオスなコラム目次 | 22:46

この本は、政治、経済、社会、文化などを思うがままに書いたコラムの寄せ集めだ。一度、自らの思索の立脚点、構造、志向性といったものを見直して点検したいというのが、この作業を行う出発点だった。そして、あとがきに書いた通り、思いがけない結論に至った。いま、私は再びこういうコラムを書くことはないだろうと感じている。世界に貢献するには、自分自身が世界の中で有利な地点に立っていることが不可欠なのだ。建設的であるためには、建設するだけの力が必要なのだ。このコラム集は敗者の夢想であり愚者の戯言だ。ただ、何らかの気休めや、思いがけないヒントくらいは提供できると思う。新しい世界を旅する前に、私は古い世界に墓を作った。

### 【目次】

- 1 . センチメントな主権議論
- 2 . 人間らしさの世紀
- 3 . 日本は貧困国なのか
- 4 . 黒い経済成長
- 5 . ニートのなになが問題か
- 6 . 心理主義の危険
- 7 . 新興心理学批判
- 8 . 仕事をする理由
- 9 . 労働という神話装置
- 10 . リチャード・ローティ
- 11 . 闘技的民主主義
- 12 . 意識の商品化という悪夢
- 13 . 解放と創造の哲学

- 14 . 活動に対する存在の優位
- 15 . 世界経済の大潮流
- 16 . SNSの現在
- 17 . 言葉はどこまで自由か
- 18 . 生態人類学から見た未来予測
- 19 . 進化経済学の視座
- 20 . 国家と雇用そして勤労の地平線
- 21 . 道化師の不在

あとがき (プラス)

筆者 白井京月。1961年日本生まれ、男性。作家・詩人。著書「ロバート劇場」ほか。

## 2013-05-29 1 . センチメントな主権議論

巷では「憲法改正」についての議論が盛んだ。しかし、自民党の憲法改正案を読んだ人がどれだけいるのだろうか。自由には「公益及び公の秩序を害する場合を除き」という制限がいたるところで加えられる。誰が公益や公の秩序を決めるのかは明白だ。マスメディアは、9条や96条に話題を誘導するが、自民党が天賦人權説を破棄したいと明言していることにこそ注目したい。自民党は、西欧近代の人権理論を離れて、日本の伝統や神話の独自性を明確化したいのである。

もちろん私はこのような改正案には反対だ。これは国益に反している。もしもこの憲法が成立すれば国際社会から非難を浴びることは確実であり、日本は再び世界から孤立する。いま、帝国（合衆国）陣営は「人権」を錦の御旗にして世界戦略を推し進めている。そのような中で「人権」に異を唱えようとしているのが今の自民党の憲法改正案なのだ。

こんな穿った見方もある。本当は人権もそれに関する理論もどうでもよいのではないのか。自主憲法という言葉で大衆を酔わせて、国民を集合的アイデンティティに陶酔させることで権力を強化しようとしているだけではないのか。

4月28日には主権回復の日の式典が行われる。これは歴史を知ろうえで重要なことだろう。いろいろな議論があるのは知っているが特に反対はしない。むしろ「主権」という言葉が日本人のコンプレックスになっているのだなということ強く思う。しかし、主権とは何だろう。主権は一般に、対外主権、対内主権、最高決定力の三つだと言われる。現在の議論は、このうちの対外主権、すなわち国家が外に対して独立し国家間是对等であるという点に焦点が当てられている。

だとするならば、今の合衆国支配の世界にあって、EU諸国ですらどれほどの主権を持っているのだろう。21世紀の今、国家の独立性にこだわるなど時代錯誤なのである。

世界を知っている政治家たちがそんなことを理解していないはずがない。それでいながら、大衆の心をつかむために「独立」という言葉を使

い、国民意識を高揚させて行く。目的は国内におけるヘゲモニーの強化だ。それ以外に何が考えられるだろう。

昔は自民党の中にもリベラル勢力があった。では、今の自民党の中にリベラル的なものがあるだろうか。そして今の日本には勢力と言えるだけのリベラル政党がない。そんな中で、9条という理想を掲げて陶醉するというのはセンチメンタルなナルシストだ。だが、威勢よく「真に自立した国家」などと叫ぶのもまたセンチメンタルなナルシストだ。それが悪いと言わない。人間とはセンチメンタルな存在だ。しかし、そういった感情を前面に出して議論することに何の意味もないことは明白だろう。時間の無駄。しかし、テレビは嬉しそうにそんな議論(?)を喜々として放送する。

重要なことは、護憲派も改憲派も、どちらもセンチメンタルであることを、そして国民もまたセンチメンタルであることを自覚したうえで「私の思い」ではなく「国益」を重視した議論を展開することだ。9条の精神が重要なのか、自主憲法というプライドが大事なのかという議論では話にならない。そんな感情論では国際社会で生き残れない。

まずは対外主権より前に対内主権の議論をする必要がある。つまり国民主権をどう考えるのか、と。国民主権である以上、すべての責任は国民にある。政治が悪いというならば、それは国民の責任に他ならない。いまこそ主権者の自覚が強く求められているのだが、これがどうにも頼りない。民主主義に対する自覚に欠けた国民による民主主義の末路など考えるまでもない。

(2013年4月16日)

## 2013-05-30 2 . 人間らしさの時代

現在の日本で起こっていること。それはハイパー管理社会化の急速な進行だ。心の病は急増し、それは本人だけではなく、その家族、あるいは企業、そして社会や行政をも苦しめている。この病気には、本人の治療だけでなく、その環境を変えることも重要だ。しかし、現実はそうではない。精神科医療も、カウンセリングも、一方的に健常とは何かを決めつけ、健常さ、適応、を目指した規格化を行う。要は、従順に適応すれば良しとされる。だが、本当にそれで正しいのだろうか。

文明が発達しているのに、人々の労働時間は増え、生活の質が落ちていく。なぜこうなったのか。それは社会の問題であるとともに、一人一人の誤った信念の結果だ。いま必要なのは、人間の規格化などではもちろんない。かけがえのない独自の存在としての「個人」を独自の存在として認め、その独自性を活かすことだ。これは単にわがままを認めよという意味ではない。

人は社会の道具では決してない。しかし、労働を義務とし、道具としての価値こそが人間の価値だと錯覚させようとする勢力は存在している。しかも、そうして自分が評価されたと喜び、この考え方を支持する労働者も少なくない。これは笑いごとではないのだ。

このままでは日本は、セーフティネットの破綻、貧困の拡大、治安の悪化、といった危機に陥るだろう。今、新しい考え方、新しい制度が早急に求められているのだと私は思う。それにはまず、人間観と社会観を見直さなければいけない。人を代替可能な機能としてのみ評価するような視点は捨て去らなくてはならない。そして、新しい価値観、新しい制度に移行することが必要がある。

もっとも、そんななことを私一人で考え、実行できるはずもない。私は、こつこつと、自分にできることを少しずつやる。そんな中で、良い出会いがあればということをお願いしている。21世紀を人間らしさの世紀にしたいというのが私の願いなのだ。

バートランド・ラッセルは1935年に発表した「怠惰への讃歌」と

いうエッセイの中で、人間は1日4時間も働けば十分だと書いている。勤勉を美德と考えているマジメな人が聞くと、鼻血を出して怒るかもしれない。ラッセルには四つの道徳的基準があった。「1. 本能的、生理的に幸福であること 2. 友情があること 3. 美の鑑賞と創造 4. 知識愛」。彼にとって、仕事は美德ではなかった。人間の本分は閑暇にあるのであって、学校（スコール：ラテン語）とは本来、閑暇の楽しみ方を学ぶところなのだ。また、ベストセラーになった「暇と退屈の倫理学」（國分功一郎）も読んだが、そこでは結論として真にマルクス的な意味での労働時間の削減と自由時間の拡大という目標が明示されていた。

しかし、私は違うことを考える。1日4時間働けば十分と言ったラッセルは極めて精力的に仕事をしていた。國分氏も同じだろう。彼らは自らの仕事を労働だとは思っていないだろうし、自分を労働者だと感じたこともないのではなからうか。

時代は変わったのだ。私たちが求めているのは苦痛としての労働ではなく、喜びとしての仕事だ。文明の発展や技術の進歩によって、人間は苦痛としての労働から解放される方向に向かうべきなのだ。それなのに、未だに苦痛としての労働を賛美し、必要もないのに雇用を創出しようとするのは実に滑稽に思える。その意味で、今、真に求められているのは新しい経済学である。それは、基本的に「ポスト成長の経済学」で「ポスト雇用の経済学だろう」。この、ポスト成長の経済学が示され、支持された時に、新しい歴史の扉が開くのだ。

当然ながら、そのような仕事が私に出来るはずもない。私は適当に頑張るだけだ。

（2013年7月11日）

## 2013-05-31 3 . 日本は貧困国なのか

近所のある喫茶店。たった1年で客層が変わった。定年退職した人たちののだろうか、一人で本を読んでいる老人が増えた。中には数人で日本の未来について政治談議をしている老人たちもいる。これから、どんどんこういう光景が増えるのだろうか。

格差ということばは現代のキーワードだが、老人が豊かだというのは平均しての話だ。若年層の格差よりも老年層の格差の方が大きい。これを老老格差という。概ね3割の老人は貧しいのだ。

少ない小遣いでも喫茶店に来て図書館で借りた本を読んでいる老人は良い方だ。介護を必要としている老人が、450万人以上いる。そして、この数は年々増え続けると予想される。

いろいろな数字を見ていると、日本はもう崖っぷちに来ていることがわかる。今は選挙で雇用の創出を各党が叫んでいるが、どれも絵に描いた餅にしか見えない。「雇用は保証する、しかし賃金は安い」では総所得は増加せずデフレは進行する一方だろう。

いま成功している日本企業はデフレを利用している企業だ。貧困層はデフレだから助かっているのだ。富裕層もデフレだから購買意欲が湧かないのだ。

日本は貧困国だ。OECD加盟30ヶ国中、4番目に相対貧困率が高い。相対貧困率とは、所得分布中央値の50%以下の所得の人の割合で、日本の場合、約7人に一人が貧困層となる。若年層の非正規雇用、高齢者のことなどを考えると、この数字が悪化する一方であるということは容易に想像がつく。

こんな状況の中で、未だ高度経済成長の幻想から抜け出せず「成長戦略」を目指すなどというのは、私に言わせれば寝言の類いだ。もっと現実を見ないといけない。ずるずると貧困層が増え続ける時代。それが現代日本の基本構造だ。

世界的に見て、企業の労働分配率が下がり続けている。これも大きな問題だ。サラリーマンの所得が増えずに経済が成長することなどあり得



ない。最低時給も国際的に見て極端に低い水準にある。本来なら潰れるべき企業が、これで生き延びている。ドラッカーは資本主義のメリットとして不効率な赤字企業が淘汰されることを上げていたが、日本ではこういう企業を守ろうとする。そして、ワーキングプアやブラック企業という社会問題が起こる。

どうすれば良いのか。それは「豊かな国」という幻想を、夢を捨てることなのだろうか？ 貧しくても幸せな国を目指すことだろうか？ まずは事実を受け入れることが重要だ。「幻想を抱けば抱くほど、破滅は絶望的なものになる」とコンサルタントの神様ワインバーグは言っていた。

さて、少子高齢化と人口減少に悩む日本と言われるが、それほど悩む必要があるだろうか？ 再びドラッカーを引くならば「プロフェッショナルの条件」という本の中でイノベーションの機会として以下の7つを掲げている。

1. 予期せぬこと 2. ギャップ 3. ニーズ 4. 構造の変化 5. 人口の変化 6. 認識の変化 7. 新知識の獲得

なんと5番目に人口の変化があるではないか。つまり、日本の人口が減少したとしても、それに対応すれば良いのであって、移民を受け入れて数合わせをしようとするのは短絡的に過ぎる。

「人口」も「富」も増えればよいという観念がどこかにないだろうか。経済成長は必要だと信じていないだろうか。そんな観念を一度とりはらって、別の角度から見れば日本は貧困国だなどとは言われたいし、そうはならない知恵があるだろう。

経済学は「富」という指標とともに「快適性」という尺度を扱わなければいけない。ストック重視からフロー重視へと転換するべきだ。古い観念を捨てて、ライフスタイルを根本的に見直すこと。そこにイノベーションがある。

(2012年12月14日)

## 2013-06-01 4 . 黒い経済成長

いま、日本では成長戦略が話題だ。アベノミクスで日経平均株価は急騰し、円はついに百円台の円安になった。しかし、それを喜んでいいのは一部の人のだけなのだろうと私は思う。

経済成長は全面的によいことで絶対に必要だというのは財界や御用学者の基本的な立場だが、若手評論家の荻上チキ氏や宇野常寛氏までが盲目的に「経済成長」という信仰を持っているのは残念だ。

真相を言えば、経済成長や途上国の開発というのは、世界の支配階級が政治的に練り上げたスローガンである。「成長」という目標に向かうことで人々に労働へのインセンティブを与える、この戦略は大いに成功した。しかし、その結果としてもたらされてのは、貧困と格差の拡大、そして社会と環境の破壊だった。悪い面を強調するとういうことになる。特に20世紀というのは人類史上最悪の貧困の世紀だったし、途上国の絶対的貧困のひどさは誰もが知っている。成長の経済学は20世紀の遺物なのであって、これからは脱成長の経済学の時代なのである。

新自由主義という考え方で経済成長が仮に達成できたとしても、その恩恵にあずかるのは極めて一部の人で、中産階級はどんどんとグローバル貧困層になって行く。これが現在の世界的な潮流である。国民は成長戦略を支持することで、自分で自分の首を絞めているのである。

良識ある経済学者は、経済成長率という指標だけで経済を評価するようなことはしない。いま構想されているのは「成長なき社会発展」だ。日本語訳のある文献としては、セルジュ・ラトゥールの「経済成長なき社会発展は可能か？」(脱成長とポスト開発の経済学)などがある。EU圏では「脱成長」の経済学が主流に近いということは知っておいて欲しい。「経済学者には二種類の人がいる、一つは国民のための経済を考える学者。こういう学者は市場の発する悲鳴に耳を傾ける。もう一つが資本家のための経済学者だ。」こう言ったのはエコノミストの水野和夫氏だった。

「批判ばかりではなく代替案を出せ」というのはよく言われることだ。

これは簡単なことである。日本の場合、まずは雇用の質の改善である。最低時給を上げて、サービス残業を強制するようなブラック企業を公開するなど罰則を強化する。一方で、制度疲労をおこしている社会保障制度を抜本的に改革する。社会保障の機能を大企業から国家に移行する。解雇規制の緩和を行う。簡単なことだとは書いたが、代替案を示すのは簡単でも、実行するとなるとさまざまな既得権や利害調整が必要なので現実には大変だ。

宇野氏は「新しいリベラル」とか「日本のOSをバージョンアップする」というスローガンを掲げて活発に活動している。これは面白い動きだ。宇野氏は、とにかく現実主義に徹してわかりやすいビジョンで多くの人の支持を得ることが重要だと考えているのだろう。そういうときに「経済成長なんて政治的に練りこまれたスローガンに過ぎない」などということは、思っただけでも言わない方が得策だという考え方もある。

しかし、ここはかなり重要な点で、経済成長がもたらす悪い結果群を多面的に評価する必要があることは間違いない。少なくとも経済成長率という指標だけで経済を見ているようではお話しにならない。財界や投資家は株価急騰に喜んでいるけれど、アベノミクスは危険な賭けだ。カッコイイかもしれないが、そういうやり方が一番困りものなのだ。荻山氏は『僕らはいつまで「ダメ出し社会」を続けるのか』の中で、脱成長論として「清貧の思想」を取り上げていたが、あれは経済学ではない。方向違いにも程があるなと唖然とした。もっと経済学を勉強して欲しい。

いまの日本は、経済だけでなく、政治、外交、社会などいろいろな面で微妙な時期、つまり極めて流動的な時期にある。それぞれ考え方も立場も違うだろう。ただ、メディアに洗脳されて自ら貧困化の道を選択する人が多いのは本当に悲しいことだ。メディアに操作されるだけの大衆は考える市民の敵である。過激な言い方だが、この現実には直視しないとイケない。市民は権力に抵抗するのではなく、大衆を洗脳から解く努力をするべきなのだ。

経済成長を実現しても貧困層は増える。何度も繰り返すが、日本は〇

E C D加盟国の中で4番目に相対貧困率の高い国で、どんどんと貧困率が高くなっている国だ。1番はアメリカだが、ここでも日本はアメリカを追いかけるのだろうか。エッ「1番じゃなきゃダメ」ですか？（笑）

（2013年5月10日）

## 2013-06-02 5 . ニートのなにが問題か

ニート問題が深刻だと言われている。政府の定義ではニートは35歳以下となっているが、それでも70万人近くいる。中年ニート、高齢ニートを加えると大変な数になる。そして、雇用情勢が好転する見込みはない。

厚生労働省はニートを個人の能力や資質の問題と考えているようだが、それは違う。これはもう、社会構造、社会システムの問題だ。教育サイドと企業サイドは新たな発想を持つ必要がある。

教育や就労ではない社会との接点を作ること。ニート問題を考える時、これが一番大事なことだと私は思う。厚生労働省の報告書でも、流行りのコミュニケーション能力が議題になっている。きっと、大人たちの期待しているコミュニケーションとは空気を読むことであり、従順さなのだろう。もう、この段階で定義が歪んでいる。そういう関係性の強要がメンタルを病む人を増やしているのだ。あるいは、そういう関係性に拒絶反応を示す人が多いということなのだ。もちろん、ニートをメンヘラ（心を病んだ人）と同一視することは誤りだ。しかし、ニートはメンヘラというレッテルが貼られてしまうこともまた事実なのである。

では、ニートのどこが悪いのだろう。雇われていない、かつ教育を受けていない状態にあるのがニートだ。経済的にそれが可能であれば、何が問題なのだろう。多くの方は将来の生活保護などの社会保障費の増大を心配しているのだろう。ニート状態にある人の心の状態を心配するような人は少数派だ。一方的にニートは悪いことと断罪されてしまい、本人もニートであることに罪悪感を感じてしまう。なんと厚生労働省の調査によるとニートの80%程度が現在の自分の状態に罪悪感を感じているという。

そうではない。これは本人の資質や能力の問題ではなく社会構造の問題なのだ。ただ悪いクジを引いてしまっただけなのだ。いや、もしかしたらそれは良いクジなのかもしれない。(?) 24時間自由に好きなことができるというのは素晴らしいではないか。もっとも経済的な問題と世

間体という問題は気になる。

そこで一つのアイデアがある。行政は教育や就労を勧めるだけでなく、現在のニート達が集える居場所を用意してはどうだろう。まずは引き籠りにならないこと。これが一番大事だ。最大の問題は体力の低下だからだ。

もちろんそれにはコストがかかる。しかし、就労への挑戦と失敗を繰り返すよりも、まずは外に居場所を作ることの方が長期的には効果があるのではないだろうか。もっとも今では Skype とニコ生があれば自宅で誰とでも会話できる。そういう中で育った世代の感覚は、中年以降の人には理解できないかもしれない。新しい情報環境はコミュニケーションを根本的に変容させた。便利なものを規制する必要はないが、その功罪は知っておきべきだ。特に世代間のギャップを問題視するのではなく、差異を相互に理解しあう姿勢が重要なのである。

繰り返し強調するが、ニートはまず自分自身の罪悪感を払拭しないといけない。そして一般の人もニートを怠けだなどという誤った認識を持たないで欲しい。そういう態度でいる限り、ニートは何も語らない。いや、語っていただけない。これからはニート様が新しい文化を作って行く。そう公言する識者もいるくらいだ。

ニートという生き方を認め、ニートが増えることを前提にした社会保障制度を設計することこそが肝要だ。ニートを減らそうという思索ではなく、ニートが病まないための、ニートが疎外されないための施策が重要だ。社会保障費の増大が悪いことだろうか。公平性の観点からすれば、特定の産業分野に金をバラマクような政府の巨大支出の方が遥かに不健全だ。日本はまったくもって資本主義的ではない。もっともアメリカの軍需産業も政府が支えているのだし、世界の資本主義というのは完全に「偽装」なのだが。

もっとも「ニートが安心して生きられる国を目指して」という理想を掲げる政党は出てこないと思う。いや、そのうち「ニ一党」ができる？

(2012年11月)

## 2013-06-03 6 . 心理主義の危険

精神分析を素人がやってはいけない。人は誰も心に物置を持っている。ちょっと入るだけで、いろいろなものが出てくる。それを扱えるのは経験を積んだ専門家だけだ。物置からいろいろなものを引っ張り出すのは簡単だ。しかし、どれが本質かなど分かったものではない。目にするどれも本質だと思ってしまう。記憶は無限にある。どんどんいろいろなものが引き出される。そして收拾がつかなくなり、状態は悪化する。これはよくある話だ。専門家だけが引き出された記憶のガラクタを整理できる。スキルも経験もない素人には不可能なのである。

ゲシュタルト療法の祖である、F. パールズは「今、ここ」だけに注目せよと言った。それが一番確実で、手っ取り早いからだ。臨床としてこの姿勢は正しいのだろう。

いまは、ネットで2万5千円で心理資格が手に入りますという広告が出され、20時間程度の勉強で心理療法家を促成栽培する民間資格がいくらかでもある。私も実際に知っているが、カール・ロジャースの名前すら知らない自称専門家すらいたのには呆れるしかなかった。

私はいろいろな心理学を知識として知っているが、どうしても斜めから見る癖がある。マインドを変えれば状況が変わるなどというのは、とんでもない理屈だ。主流派の臨床心理学は社会通念を押し付ける。異端は検証が無い。本当の自分をありのままに受け入れる、あるいは手放す。どれもこれも実に怪しい。そして、いたるところで怪しいセッションが行われ、時は流れ、お金が動く。今、カウンセリングを受けたいと考える人が増えるのと同じく、カウンセラーになりたいという人も増えている。カウンセラーなら私にでもなれる。そういう勘違いをしている人が山のようにいる。

巷には、幸福になれる、などといったコピーに飛びつく人が多い。しかし、常に幸福だということなどあり得るだろうか。共感もそうだ。それは稀だから喜びなのであって、いつでも誰とでも共感できるならば、そこに喜びはない。

ここまで、私はかなり現実的なことを言っていると思う。さらに言えば、私は脳科学についても斜めに構えている。特に、世俗の脳科学は安っぽい人生論のようだ。また、脳科学が倫理的な問題の基準になるなど怖いことを言う人もいる。脳科学は科学の玉座を目指しているかのようだ。

バートランド・ラッセルは、幸福は内界ではなく外界に求めるのが健全だと言った。その理屈は私にはよくわかる。それでいながら、私は内面への興味から離れられない。心の物置の隅を見たいという欲望に逆らうのは実に難しい。そして、これは現代に特有の誘惑なのだとも思う。

問題は、一般人が心の問題を抱えている人から逃げて、それを専門家に押しつけようとしていることにある。悩みや落ち込みには鬱というレッテルが貼られ、専門家と称する人々のいる業界に委ねる。「鬱は心の風邪」「早期に病院へ」などのキャンペーンの影響で、多くの人が簡単に「病人」にされる。

精神科医療やカウンセリングは必要だ。しかし、安易な心理主義や自己啓発は思考停止を招く。心が変われば世界が変わるという人もいる。どう変わるのかは知らないが、それはとても恐ろしいことなのではないだろうか。

胡散臭いカウンセラーの特徴は「批判はよくない」と最初に釘を刺すことだ。これは、その人の師匠からの受け売りだろう。愚かなる師匠は批判されるのが怖かった。それだけのことだろう。また「批判は自分に返ってくる」と忠告する人もいるが意味が分からない。私は批判されることなど大歓迎だ。それこそが自らの進歩、成長の絶好の機会ではないか。批判は否定ではない。批判することで相互に進歩、成長できると思うからこそ批判するのだ。余談が長くなったが、とにかく心の持ち方で人生が変わるなどという戯言に騙されてはいけない。現在の心理主義の風潮は滑稽なだけでなく、とても危険なものだ。

このような状況になったのは、家族や地域社会、友人関係といった利害ではなく結ばれた信頼のおける第一次集団が崩れたという社会的背景



がある。家族も親友も、深い悩み話し相手ではなくなってしまった。そこに、心理の専門家というビジネスが生まれ「トンデモ心理学」が数多く生まれたのだ。もちろん、マトモな専門家もいるが、間違いなくその比率は低い。確率的に言って、マトモな専門家に出会う前に、トンデモナイ自称専門家にお金を貢ぐ可能性の方が高い。直裁に言えば、カウンセリングを受けることで状況は悪化する可能性が高いと言える。

解決策は以下の二つだ。家族や友人の悩みから逃げずに話をすること。また、当事者は主体性を放棄して結論を第三者に委ねないこと。これが肝要だ。相談相手がなく、主体性が崩壊したならば、多くの場合「心理ビジネスの餌食」になる。日本はこの分野で世界の最先端にあるという。もちろん、悲しむべきことに。

( 2 0 1 2 年 1 0 月 )

## 2013-06-04 7・新興心理学批判

今回問題にしたいのはNLPだ。NLPとは、神経言語プログラミングの頭文字であり、ニューエイジ系の心理学である。カウンセリングやコーチングで実践的効果があるとされ、日本でも大流行している。私も心理学や脳科学を知識としてではなく実践で生かす必要性を強く感じ、昨日、書店で一冊の本を手にした。

「人生が劇的に変わるマインドの法則」(久瑠あさ美：著)が、それだ。なんともなタイトルだが、私はそこまで追い込まれている。もう人生を「劇的」である必要がある。(笑)さらに帯にある筆者が美人だった。これで完全にサブリミナル・マーケティングに落ちた。家に帰って読むと、筆者の久瑠氏は元モデルだった。

この本には、NLPという言葉は一度も出てこない。しかし、使われている技法や考え方はNLPそのものだ。NLPという言葉を使わないというのもマーケティング戦略に違いない。

マインドの法則とは、たった3つのプロセスで「在りたい自分」を創るという久瑠氏の理論であり、技法である。3つのプロセスとは、一つには、自分がどう在りたいかという潜在意識のwantを呼び覚ますこと。二つ目が、イマジネーションを駆使して未来のビジョンを描くこと、三つ目が、自分を客観的に見る視点(マインド・ビュー・ポイント)を高めることだ。特に、ビジョンをベースに、未来、現在、過去の順で自分を俯瞰することが重要なのだと言う。この本では、この3つのプロセスについて具体例を用いながら熱い言葉で「マインドの法則」の持つ意味が語られている。

私も熱くなり、この本に期待しながら一日で読み終えた。NLPの本には難解なものが多いが、この本は分かりやすい。そしてすぐにでも実践できそうだ。私も人生を劇的に変えたい。そんなことを思い、本の中のワークシートも実際に書いてみた。自己変容、自己改革というはまだ丸い感じだが、人格変容、人格改造となると危険な感じがする。しかし、NLPではまさにこの人格変容こそが主要な課題であり、なりたい自分

を設定し、それを実現することを成功と位置付ける。これは一つの考え方だ。好き嫌いは言えても、良い悪いは言えない。とはいえ「在りたい自分」が本物がどうかを判断することは難しいと思うのだが。

クライアントの潜在意識に入り込み、周波数を合わせる感じで、本当のwantを探りあてる。こう書かれると、それは超能力者の技のように思えてくる。さらに、潜在意識が高次で顕在意識が低次だという見方にも問題がある。脳科学的に言えば、非言語の古い脳が無意識の領域であって、新しい脳こそが言語領域なのだ。しかし、この本では低次と高次が逆転する。

もっとも、私は潜在意識の重要性を否定しているのではない。大切なのは、古い脳（潜在意識）と新しい脳（言語領域）のつながりだ。これがうまく行かないと、思考と感情、そして行動がバラバラになる。いかに脳および脊髄を統合された状態にするのか。それが課題であることは間違いない。

さらに本書では社会や組織と個人の関係についても触れられている。人には社会や組織にいるかぎり、しなければいけないこと（have to）があると言う。しかし、この制約の中でも「やりがい」（want）を見つけることは可能だ、と久瑠氏は言う。あたりまえのことが書かれているようだが、この点には特に注意したい。

携帯電話のセールスマンが目標を売上から顧客満足に変えることで成功したとう事例が載っていた。しかし、はたして本当にこのセールスマンのwantは顧客満足だったのだろうか。それが真の自分なのだろうか。偽物のwant、あるいは作られたwantではないと断定できるだろうか。そこには、個人は社会や組織の中で役に立つべきだという価値観が大きく横たわっているということを指摘しておきたい。

最後に潜在意識を書き換えるということの怪しさについて書いておく。近年、潜在意識という情動に訴えるマーケティングはビジネスだけでなく政治でも活用されている。確かにこれは効果がある。しかし、潜在意識を書き換えることで自己を変容できるというのは違うだろう。むしろ、

潜在意識を感じながら、顕在意識を、つまり言語領域を書き換えることが自己変容につながるのだと私は思う。そうでなければ、人類が本能を克服し、言語を用いて社会を、そして文明を築けた理由が説明できない。

重要なことは、私たちが社会慣習や宗教、常識やプロパガンダ、教育プロセスなどに縛られることなく、自由にイメージーションし、wantに従って感じ、考え、自分を客観的に見据えて、思考と感情と行動の整合性が保たれているということだろう。

安直なイメージで共感して、簡単にビジョンを共有し、瞬時にラポール（信頼）を確立するなどというのは理想であるどころか最悪だ。それこそが、全体主義への道ではなかったか。いま一度、歴史を振り返る必要があると思う。

（2013年2月）

## 2013-06-05 8 . 仕事をする理由

巷には「なぜ働くのか」だとか「働くとは何か」といった本が氾濫しているが、こんな簡単な問題は数行でまとめられる。多くの人が、答えは一つという前提で考えているからいけないのだ。

仕事をする理由は、以下の三つの要素を考慮したうえでの判断である。

- 1 . その仕事をするのが楽しい。  
( やりがいを感じる、夢中になれる、充実感が得られる )
- 2 . その仕事は金になる。  
( 最低限生活できる必要があるし、多いほど望ましい )
- 3 . その仕事は、広い意味での資産を築く。  
( お金、キャリア、スキル、資格、人脈、体力、等 )

この考えが間違っているとは思わない。しかし、いま仕事を探している人や、ワーキングプアといわれている人からすると、この考え方は仕事を選べる立場にある人の話であって、何の役にも立たない、いや、むしろ腹立たしい考えだったのではないのかと今ごろになって思う。

精神的報酬、経済的報酬、広い意味での資産、どれを重視するのかを明確にしておくこと。売れなくても作家を目指すのか、単純労働でも高賃金の仕事を目指すのか。この辺は人それぞれだ。

ここで気をつけることは、経済的報酬にマイナスはないが、精神的報酬にはマイナスがあり得るということだ。社会的に罪悪感を感じるような仕事や、社内での人間関係が最悪の場合などは、過労死やメンタル的な病に陥る可能性もある。これでは、いくら高給でも差し引きマイナスであることは明白だろう。

終身雇用や年功序列の時代は終わった。これからは、一般のサラリーマンにとっては冬の時代だと言われている。会社にしがみついて生きようとしても、その世界が安泰だとはなくなった。上記の3項目の3番目、

広い意味での資産（お金、キャリア、スキル、資格、人脈、体力、等）のうち、特にスキルと人脈は重要になる。

人脈とは有名人や有力者と知り合いになることではない。仲間と呼べるだけの友達や、気軽に相談できる専門家などだ。

人生設計の難しい時代になった。人生設計など不可能だし、設計など不要だとも言える。しかし、自分が何に喜びを感じるのかは点検しておきたい。何が仕事の原動力であり喜びなのか。働いている人なら喜びは誰にでもある。そうでなければ働いたりしないはずだ。それとも辞めるべき状況なのだろうか。

え、「仕事をするのに理由はいらない？」（ま、負けたか？・・・笑）  
（2013年5月）

## 2013-06-07 9 . 労働という神話装置

現代の労働神話は、一方で労働を美德として賞賛し、一方では労働を刑罰として捉える。この両義性の中で、労働は人を格付けする装置として機能する。アメと鞭によって、人は懸命に、あるいはそれなりに働く。そこには厳然として階層があり、嫉妬や怨嗟、欲望や絶望が渦まいている。

仕事から得られる報酬には二種類ある。一つが経済的報酬。もう一つが精神的報酬だ。簡単に整理しよう。

A . 十分な経済的報酬を得ていて、かつ、精神的報酬にも満足している人。

B . 十分な経済的報酬を得ているが、精神的報酬を得られていない人。

C . 十分な経済的報酬を得られていない人。

さらに細かく分類する。

A - 1 . 精神的報酬の中身が社会的意義など個人の価値観に根付いている人。

A - 2 . 精神的報酬が経済的報酬という外在的要因から来ている人。

B - 1 . 経済的報酬が精神的報酬のマイナス分を上回っている人。

B - 2 . 経済的報酬よりも精神的報酬のマイナス分の方が大きい人。

C - 1 . 精神的報酬など不要と考えており、経済的報酬の向上を願っている人。

C - 2 . 精神的報酬を得られない仕事には価値がないと考えている人。

一般的に言えば、精神的報酬の高い仕事というのは知識や技能を要する仕事で希少性があり、それゆえに経済的報酬も高い。当然だが、誰にでもできる仕事となると経済的報酬も低くなる。まあ、こんなことは書くまでもない。重要なのは、経済的報酬は法律で最低賃金が定められているが、精神的報酬についてはマイナス値がある。それなりの給料をもらっていないながらも精神的不満が大きい人もいれば、収入は低くても精神的満足度の高い人もいる。どちらが幸せかを比較することはできない。

それは各人の認識と判断、考え方や感じ方の問題でしかない。

仕事と労働という言葉を使い分けることも出来る。仕事は主体的で能動的な活動、労働は指示に従う従属的な活動と定義することもできる。もっとも、ほとんどの場合において仕事の要素と労働的要素は混在している。ただし、その比率には大きな差があるが。

いま、雇用問題が叫ばれているが、経済的報酬だけで精神的報酬を得られないような雇用には疑問を感じる。単に雇用を増やせば良いという考え方はいかななものか。また、ワーキングプアを増やしたところで、GDPは増えない。このような相対的貧困の増加が社会保障費の抑制になると考えるのも短絡的だ。むしろ、相対的貧困率の増加傾向（今の日本では17～18%が相対的貧困層だ！）こそが、経済にとっての大きなマイナス要因となっているとも考えられる。日本経済を支えていた厚みのある中間層が崩壊したと言え、わかりやすいだろうか。

重要なのは単なる雇用の創出ではない。仕事の内容や条件、精神的価値にまで踏み込んだ「雇用の質」を高めて行くことが重要なのである。

批評家の宇野常寛氏が語っていたことだが「いま必要なのは、普通の人がそこそこに働いて生きて行ける環境でありモデル」だ。頑張った人が報われるなどというのは幻想だ。能力のない人が頑張っても報われることはない。いま必要なのは多様で柔軟な働き方なのだろう。

少子高齢化と産業構造の変化の中で、将来を見据えて雇用のモデルなど作れるはずもない。重要なのはセーフティネットを整備したうえで、流動的な雇用環境を作り、激しく変化する経済環境に対応できるようにすることだ。一人の人が、生涯を一つの仕事、一つの会社で過ごすような時代ではない。変化を前提に労働力の流動性を高めて行くことが望まれている。

そしてまた「雇用は安上がりな福祉」という古い観念を見直すことが重要だ。雇用を維持し拡大するために政府は、そして企業はどれだけのコストを支払っているのか。いかに不必要で効率の悪い労働が蔓延しているのか。そのために、どれだけ経済の健全さが損なわれているのか。



既得権の問題とともに、短絡的な指標の改善を目指すことの弊害にも気がつかなければいけない。

人は働かなくても精神的報酬を得ることができる。労働を美德だということ、労働から排除された人々を蔑視していることに等しい。生涯現役という嫌な言葉がある。いったいつからこの国は奴隷社会を目指すようになったのか。亡霊を美化する悪魔のような人々に騙されてはいけない。

(2013年5月)

## 2013-06-15 10 . リチャード・ローティ

リチャード・ローティ (1931 - 2007)。最近なにかと話題のアメリカの哲学者だ。その思想を簡単に整理してみた。

### 1 形而上学

形而上学とは何かを知らない人はいませんよね？ なに。いる？

ま、簡単にいってしまえば、形而上学というのは、道徳的なジレンマを解決する公式や真理があるという考え方です。道徳的なジレンマとは、めちゃくちゃ単純な例で言うと、ボートが沈没して5人が海に投げ出され、一人だけなら救助出来る場合、誰を助けるのか、助けないのか、といった問題ですね。普通に考えれば、そんなものは色々な考え方があるわけで、どれが絶対正しいなんて言えないですよ。でも、真理や正解は必ずあるというのが形而上学だと考えれば良いでしょう。

形而上学は哲学の一分野とされますが、多くの宗教が形而上学的なわけで、そう考えると、世界の圧倒的多数派は、形而上学を信じているともいえます。

一方、反・形而上学を主張する人とは、そう言った道徳的ジレンマを解決するような、真理や公式は無いと主張する人のことですね。ローティは、こういう人のことを、「アイロニスト」と呼ぶんです。皮肉屋という意ではないので気をつけてください。

### 2 リベラル

昔は、左だ、右だ、中道だと言うのが大衆的な分類でしたが、今は使いませんね。(使いますか?)

今の一般的な分類は、以下の4つです。

- 1 . リベラリズム (自由主義)
- 2 . リパタリアニズム (自由至上主義)
- 3 . コンサバティズム (保守主義)
- 4 . コミュニタリアニズム (共同体主義)

おお、座標軸が出来て、線から平面になりました。もっとも、思想・

信条あるいは哲学が、実際にはもっと複雑な事は、誰にでもわかりますね。「思想地図」という本もありますし、それに対する異論・反論もあって収集がつかないわけです。また、大枠での対立より、半ば身内での対立が激しかったりするの、どこの世界でも一緒のようです。

でも、ちょっとまって下さい。こんな単純な分類の話がしたいのではないのです。

私がこだわりたいのは「リベラル」です。ローティはリベラルをどう定義しているのでしょうか。ローティは、シュクラーにならって、「残酷さを最悪だと考える人がリベラルだ」と定義するのです。そして、残酷さを最悪だと考えることに形而上学的な理由などいらない、基礎づけなどいらないのだと。要は、自分はそう思うと根拠などなく主張して良いということです。はい。それがリベラルなんです。経済学者のシュンペーターも同様のことを言い、自らをリベラルだと宣言していましたね。

ローティは、自らを「リベラル・アイロニスト」と呼びました。私も「リベラル・アイロニスト」です。これって相当に解説のいる言葉ですね。(笑)

貴方は残忍さが好きですか？

残忍さは本能であり不可避だと思いますか？

残忍さとは何ですか？

人類は歴史的に残忍でなくなっていると言う学者の説をどう思いますか？

### 3 プラトン無視

流石にプラトンの名前を知らない人はいないですよ。義務教育の教科書にも出てきます。え。名前は知っているけど、忘れた？ ソクラテスの弟子にして、アリストテレスの師ですね。です。流石にそれくらいは覚えてますね。

この時代の人達が試みた哲学というのは、共通の哲学的基礎を打ち立てて、個人の自立と、共同体の公共善を統一・結合させることでした。まあ、これは無謀な野心なのですが、哲学者というのは共通して、こう

いう無謀な野心に駆られるものなのでしょう。そして、それこそが哲学の存在理由の一つでもあったわけです。

もちろん、ニーチェやフーコーのように、道徳に懐疑的な哲学者もいれば、カントのような道徳的オプティミストもいれば、いろいろな哲学者がいたわけですが、みんなこの、「プラトンの呪縛」というべきものと絡んでいました。

しかし、ローティは違いました。私的なものと公共的なものを統一しようという考えを、「そんなの無理」とあっさり捨て去ることで、プラトンを基本的に無視する立場を取ったのです。何と革新的なのでしょう。これこそ私が、ローティ以降を「哲学 2.0」と呼ぶ理由なんです。

で、現代はどういう時代かということ、ポストモダンと言われながらも、市民レベルでは未だに「プラトンの呪縛」が幅をきかせています。残念ですね。

#### 4 方法を持たないプラグマティズム

アメリカの哲学と言えば、プラグマティズムですね。「プラグマティズムこそアメリカの哲学」。これは1950年以前のアメリカの決まり文句でした。しかし、次第にアメリカも大陸哲学に傾いて行くのです。

で、アメリカ社会でプラグマティズムがどう機能したのか。ローティはこう見ます。

因習の殻を破り新しいものを受け入れることを奨励すること、宗教文化を振り払い自由にする、道徳律の影響を抑え新しい立法を恐れないことなど、プラグマティズムは科学主義的、実験主義的に働いたのだと。そして、この反イデオロギー的自由こそが、アメリカの最も価値ある伝統だとローティは言います。

しかし一方で、ローティのプラグマティズムは従来のプラグマティズムとは異なります。それは、「方法を持たないプラグマティズム」と呼ばれるものなのです。プラグマティズムには、信頼できる方法があるという科学主義がありました。しかし、ローティはそのような方法は無いという反科学主義の立場をとります。これは、ネオプラグマティズムと呼

ばれたりもします。

ローティは、哲学的な深さを悪しきものと考えます。さらに、プラトンの夢に至っては最悪のものだと考えます。彼の基軸は自由主義の擁護なんです。そのためには、「方法を持たないプラグマティズム」と、「深さを奪われた大陸哲学」が一緒になればよいのにとまで言うのです。

難解ですか？ ローティの論文「方法を持たないプラグマティズム」の一節を引用しておきましょう。

「確かにわれわれには、互いに語りかけ、世界に関する見解について話し合い、力よりも説得を用い、多様性に対して寛容であり、心から反省する用意のある可謬論者であるべきで義務がある。けれどもこれは、方法論的原理を持つ義務とは、別のものである。」

## 5 脱構築

脱構築。何それ、美味しいの？ などと聞く人は冗談が好きな人でしょう。まあ、冗談はさておき、脱構築を聞いたことも無い人、だいたい知っている人、詳しい人がいるでしょう。とりあえず、誰にでもわかるように書いてみます。

脱構築とは、哲学者ジャック・デリダ(1930 - 2004)の用いた言葉で、フランス語では、デコンストラクション、英語では、ディコンストラクションであり、日本語では解体構築と呼ばれることもありますね。もともとは工学系の言葉で、機械を分解して部品を取り換えて別の機械を作ることなどを指します。

デリダのいう脱構築とは、何かを伝える時には、すでにそれに対する反論が、そこに含まれているということの論証です。当たり前のお話ですね。簡単に言えば、何にだって反論できるよということ。

ちょっと難しく言うと、二項対立の解体作業であり、ロゴス(言語)中心主義への批判的方法でしょうか。

## 6 民主主義

「民主主義？ それって結局、多数決のことだよな」こんな風にいう人がいますが、違うんですねえ。

民主主義とは、市民の討議による政治です。多数決というのは、意思決定の技法の一つであって、本質ではないんですよ（異論があることは、100も承知ですよ。笑）

ムフ（1943 - ）という政治哲学者は「闘技的民主主義」を主張します。それは、社会の多元性を認め、多元性を受け入れる民主主義です。目標は一致ではなく、差異を認め合うことなんです。

それから・・・民主主義とは本質的にローカルな性質を持つものなんです。地域や文化に根差した民主主義が好ましいということですね。国が大きくなると、民主主義も難しくなります。世界民主主義となると（そんなものは今現在ありませんが）、もっと難しいでしょう。

みなさんは、民主主義について、どんな本を読まれましたか？ え、民主主義が好きじゃない？？ ふむ、ムフを読もう・・・。

## 7 自文化中心主義

一般に、自文化中心主義というと、自文化を最高のものとして他文化を否定したり、排除したりする、エスノセントリズム（ウィリアム・サムナーの造語）のことを言います。何とも怖い考え方です。

しかし、ローティもまた、自分のことを自文化中心主義者だと言い出すんです。「え、なんで？」と思いませんか？

もっとも、ローティのいう自文化中心主義は、自文化至上主義ではありません。そうではなく、自分自身が何かを見る時には、必然的に自文化という立脚点から見るより他に方法がないという意味なんです。

この語りはかなり戦略的です。自文化中心主義という言葉をやさしく再解釈しているのです。

いかがでしょうか？ あなたは、リベラル・アイロニストですか？ 私はもちろん、リベラル・アイロニストですよ。

## 2013-06-16 1 1 . 闘技的民主主義

シャンタル・ムフ。1943年ベルギー生まれ。女性。ラディカル・デモクラシー（闘技的民主主義）の主張で有名な女性政治学者だ。本書は政治学の専門書だが、一般人でも十分に読める内容になっている。

ムフは冷戦終了後の世界を、合衆国のヘゲモニー（覇権）に対抗する正統的な回路が存在しない一極的な世界として認識する。それは決して調和的ではなく、新しい種類の敵対性が無数に炸裂する世界だ。例えばテロリズム。それは病的な個人に発するものではなく、広範な地政学的条件による必然だとムフは指摘する。

本書（「政治的なものについて」明石書店、2008）の目的は、現在の「ポスト政治的」時代精神に対する批判の基礎となる枠組みを描くことだとムフは言う。ここで「ポスト政治的」という言葉については説明と注意が必要だろう。議論を通じて合理的な問題解決が可能であると考えるハーバース的なリベラリズムをムフは否定するのだ。政治的なものが、いまや道徳の作用領域で善悪として上演されていることへの強い懸念。リベラリズムの賞賛する寛容への嫌悪。その理由は、一つの権力がみずからの支配の事実を隠べいつつ世界規模のヘゲモニーを確立しようとしている危機認識に由来する。

ムフは本書でリベラリズムに限らず、第3の道であるコンスモポリタン民主主義、マルチチュードといった各種対抗モデルも徹底的に切り落として行く。リベラリズムの合理主義的で個人主義的な方法は、結果として政治的なものを否認するとムフは言う。ムフの言う政治とは、その本性上の対立だ。われわれ/彼らの区別こそが、政治的なアイデンティティを形成する条件だと考える。そして、そこには宿命的に敵対性が宿る。ムフの思想では、あらゆる社会秩序の本性はヘゲモニー的なのだ。問われるのは、そのヘゲモニーの性質ということになる。

第2章では、政治と欲動についての興味深い記述がみられる。政治的な欲動には「個性と卓越性に向かうもの」とは反対に「群衆の一部として大衆と一体化する瞬間の忘我の境地」があることを指摘する。これは

群衆を魅惑する性質がある。そして、合意の意義を強調することは政治的無関心を招くのだと結論づける。人びとが政治的に行動するためには集合的アイデンティティと同一化できなくてはならず、政治の情動的次元は決定的に重要なのだと。そして、政治から情念を除去することを望み、それが可能であると主張する理論家は政治的なものの力学を理解していないと付け加える。現在のネオリベリズムのヘゲモニーにはいくつもの対抗モデルがある。ここで重要となるのは、政治の本性と目的についての徹底的な再考だとムフは言う。

第3章では、ウルリッヒ・ベックの再帰的近代の理論やリスク社会の概念、サブ政治についてなどだけ検討される。さらに、アンソニー・デモンズのポスト伝統社会、つまり左派/右派が時代遅れになっているという説も取り上げる。しかし、ムフはこれが気に入らない。理由は二つある。一つには政治から対抗者の概念を除去しようとしていること。もう一つは、政治的なわかりやすさが消えていることだ。ムフはペリー・アンダーソンの以下の言葉まで引用している。「民主主義的な生活が対話であると考えたことの危険は、政治のまず第一の現実が闘争であり続けることの忘却である」言い方はやや過激だが、言いたいのは暴力の肯定ではない。政治が論争の場でなく、単なる操作の場に引き下げられることが、民主主義の危機を招くと主張しているのである。

第4章では、ヨーロッパの最近の事例についての分析が加えられる。右傾化したオーストリアで何が起こったのか。ベルギーはどうだったのか。右旋回したイギリスのブレアの背景。対テロ戦争を背後で操るネオコンの戦略とは何か。この章の末尾ではハーバースが徹底的に槍玉にあげられる。コスモポリタンな法が世界中で受け入れられるという夢想到に嘔吐を示す。そしてまた、ローティエも以下の点で批判される。ローティエは社会の客体性が、権力の作用を通して構築されていることを認めていない、と。

第5章は「どの世界秩序を目指すのか」という題だ。いろいろな学者の著作や文献に批判が加えられる。ダニエル・アーチブスの「コスモポ



リティカル民主主義」に対しては、構成員のあいだで権力が不均等に配分されている国連を強化し、より民主的に改革することが可能と考えるのは非現実的であるとして却下する。さらに、メアリーカルドーのように、民主主義的な手続きをグローバルなレベルで再構成できるとも考えてはいない。マルチチュードに至っては何の戦略もないもので、第二インターナショナルを想起すると一刀両断だ。とにかく、ムフは統一された世界という幻想を捨てようと呼びかけているのであり、多元主義を真剣に検討しようと呼びかけているのである。

結論でも示される通り、多元主義にも限界はある。そして、社会の分裂の認識と対立の正当性を認めることこそが重要なのだという。民主主義は必然的に対抗的でなければならない。これがムフの主張だ。例えば、人権の普遍性についてだが、これもまた西洋文化的発想なのだとムフはいう。それをアジア諸国などに押しつけるのは良くないことであり、ヨーロッパはヨーロッパ中心な発想を破棄するべきだとムフは主張するのである。

ムフの希望はユートピア的ではもちろんない。ただ、現在の一極化したヘゲモニーとポスト政治的状况に対抗して、多元的なものに賭けてようとしている。オルタナティブはヘゲモニーを多元化することでしかないというのが結論なのだ。そして多元化とは新しい思想などではまったくなく、地域的な文化や伝統、そして宗教なのだろう。前に進むことにも価値はある。と同時に、古いものを守ることに価値がある。はたして私たちはいま選択肢を持っているのか。それを思うと、いつも眩暈がする。

## 2013-06-28 1 2 . 意識の商品化という悪夢

人が人であるというのは、どういうことか。それは、そこに「われわれ」があるということだ。そして、その前提となるのが、特異なものとしての自分の存在である。人はナルシステでなければいけない。真にナルシストでなければ、人を愛することはできない。アリストテレスの言うフィリア（友愛）こそが、われわれという意識と共感の前提なのだ。

しかし、現代のハイパーインダストリアル社会にあって、もはや人は特異な存在としての自分を認識できなくなっている。個人は、いくつかのセグメントによって特徴づけられた一つのパターンに過ぎない存在となってしまう。土地、労働、貨幣に次いで商品化されたもの、それが「意識」だった。ハイパーインダストリアル社会においては「意識の商品化」が常態化しているのだ。それが適応の条件とされているのだ。そこには、われわれも、友愛も、共感もない。現代はそういう意味において危機的な状況にある。

ハイパーインダストリアル社会。そこでは、日常生活がインダストリアル化され、機能的なものとしてフォーマット化されている。その罨にかかっているのは労働者だけではない。管理者も経営者も同じことだ。この社会における主要な兵器はマーケティングである。より正確に言えば、マーケティングに属するとされるある種の技術である。私達は消費という快楽によって、快楽から疎外されて行く。人は消費によって自らをプロファイリングする。それは意識的である場合も、無意識である場合もある。現代のマーケティングはサブリミナルに脳の情動領域を侵食して行く。

今、脅かされているのは、人の精神であり、知性であり、情動であり、感覚だ。言い換えれるとそれは人としての能力そのものだ。このような悲惨な状況は、大衆とか貧困といった問題とは違っている。危機に晒されているのは、すべての現代人だ。この問題に気がついている知識人といえども状況を回避することは出来ていない。逃げ道は見つからないし、物理的に生きて行くためには、現代という環境を受容し、利用するしか

ない。

さて、本当に逃げ道はないのだろうか。本当に人間は瓦解しているのだろうか。哲学者や思想家の過激な言説はあまりに一方的で、極端なものではないのか。そういう慰め方もあるかもしれない。しかし、現実の破壊はあまりにも壊滅的で、生き残った者たちを見つけること、あるいは治癒を試みることは大変そうだ。

処方箋はいくつもある。しかし、それを薬と取り替えてくれる薬局はどこにもない。つまり、今の世界では政治が機能していない。あるいは、芸術が機能していない。機能しているのは資本主義であり、マーケティングという技術だ。そして今、注目を集めているのが感染である。感染マーケティング。これはおそらく最終兵器と言えるものだろう。私たちにはワクチンが必要なのだ。あるいは抵抗する武器が。

現代文明の中で、都市生活の中で、または治安の良い地区に住みながらも、人々は現代の戦争の最前線にいる。われわれの敗北は「人類の歴史」の終わりとなる。われわれは誰も敗北を望まない。

ベルナール・スティグレル(1952-)は、気鋭のフランス人哲学者であり、ドゥルーズ=ガタリの系譜にある。本書のタイトルである「象徴の貧困」とは、知的な生の成果である概念、思想、定理、知識などと、感覚的な生の成果である芸術、熟練、風俗などの双方を指す。本書の副題は「ハイパーインダストリアル社会」だ。そこでは、われわれの前提となる個(自分)が衰退し、退化、解体されているのだとスティグレルは主張する。本書では二つの映画と一つの寓話についての分析と省察が行われて行く。

訳者あとがきにある通り、本書は哲学の専門家ではない一般の読者にも読みやすいように工夫されている。もっとも、刺激的な本なので、個が触発され日常が破壊されるということは有り得る。知的抵抗力の無い人は読まない方がよい。

## 2013-06-29 1 3 . 解放と創造の哲学

5月のことだ。思想家である私に、自らの思想を示す著作がないのは問題だなと思った。各論についての批判なら簡単だ。しかし、そんなものを集めても思想とは言えない。立脚点と体系を明確に示すこと。そのヒントを求めて、私はブログを立ち上げた。

近代経済学や心理学、そして脳科学や医学といった権力者御用達の学問とその欺瞞を暴きたかった。巨大資本の持つマーケティング技術の恐ろしさを語りたかった。だが、そんなものは私が得た知識の一部であって、より深い知見を持った先駆者が多数いる。そんなことを書くのは私の役割ではないだろう。そうではなく、なぜそういう考えを持つのかという哲学的な支柱を開示しないといけない。いや、嘘はいけない。開示ではなく構築と言うべきだ。この作業を終えるまで、私は思想家を自称するのをやめることにした。

成長、進歩、豊かさ、絆、統一、発展……。一般人はこういうものをポジティブなこととしてありがたがる。しかし、こういった言葉こそが権力の用意した麻薬なのだ。偏った価値観を当然のごとく押しつけられ、協調を強制される。たとえ疑問を持ったとしても、それを口にするに損をする。人はシステムに組み込まれ、機能としての価値を与えられる。時代への絶望。しかし、そんなものは生きる役には立たない。

もっと戦略的でありたい。否定と抵抗という戦術は幼稚だ。そうではなく、事実を明確にし、メリットとデメリットを示して権威を相対化することが必要なのだ。短絡的に賛同者を増やすのではなく、ニュートラルに判断できる人を、そして判断できる状況を作ることが重要なのだ。

あらゆるメディアにおいて、資本に都合の良い論理が溢れている。もちろん反対派の言説も流通はしている。しかし、それが一定の水準を越えることはない。つまり、反対派の大御所達は、勝てない戦いをするだけで収入を得ているのだ。それは権力の側が「自由という旗」を掲げるために必要な存在なのだ。言い換えれば彼らは共犯者だ。そういう反対派の言説に、私は興味が持てない。

私は権力に抗うつつもりはない。ただ、私の思索は「押しつけられた常識」から常に自由でありたいし、解放された状態でいたい。はて、私の役割は何だろうか。それはまだ文章化されていない思索を開示することであり、現実的な方策を示すことであり、それを上手く流通させることだろう。現実の社会を、あるいは現実の人間を動かさないようでは哲学とは言えない。

私が目指すのは「解放と創造の哲学」だ。私は一個の人類として、その任務を遂行する使命を感じている。使命など妄想であることは承知している。しかし、世界は錯覚と幻想と妄想で動いているのだ。それが人間の社会であり歴史なのだ。正常か狂気かは問題ではない。ただ存在し活動すること。たとえ無意味に見えるとしても、それは確実に作用するのである。

(2013年6月29日)

## 2013-07-01 14 . 活動に対する存在の優位

幸福の源泉は活動から生まれる喜びだと言われる。活動とは、製作、スポーツ、演奏、演技、ゲーム、料理、創作、などなど何でもよい。熱中し没頭できる好きなことをやる。真の幸福はこうした活動からしか得られないとまで言う人もいる。

もちろん活動自体が楽しいだけでなく、ある程度の成果が出ると評価されるし、仲間との交流も生まれるだろうし、称賛をあげることもあれば、報酬が生まれることもあるだろう。活動することの内在的な喜びと共に、外在的な喜びを得ることもあるし、それもまた一つの目標になる。

ただ、だれもが活動の対象を持てると言えるだろうか。楽しみを見つけれない人はたくさんいる。実は私もその一人だ。昔はいろいろな楽しみがあったが、ある障害を抱えることとなり活動すること自体が難しくなってしまった。まあ、それでもこうしてブログを書くという活動を楽しんでいるのだから重症ではないだろう。しかし、本当に何もできない人というのは少なくないのだ。そういう人に活動を奨励するというのは、時に残酷なのではないのか。ふと、そんなことを思った。

はたして喜びは活動からしか生まれえないのだろうか。そこで考えられるのが、存在していること自体に喜びを感じるということだ。これは、自分自身の人間性に対する信頼から生まれるものだ。優しさや、寛容といった人間としての在り方に自信を持つこと。そして、失われた活動に対する挫折感や敗北感を捨てること。そうして存在自体に自信が持てるようになれば、生きているすべての時間から満足が得られるように思う。

また、この存在自体への自信は、活動できる人にとっても大切なことだと思う。活動する人自身が素晴らしい存在であるならば、その活動もまた輝きを増す。

活動と存在、どちらが重要かと言われれば私は迷うことなく存在だと答える。自分が出来ていなひとが活動で成功することは珍しくない。しかし、私は人を活動だけでは絶対に評価しない。たとえ功績や成果が無くとも、人間としてどうか、ということが一番大事なことだと考えるか

らだ。

まずは人間を磨こう。この言葉は私自身に対する励みだ。誰に対しても開かれた態度をとること。優越感や劣等感と無縁であること。できるだけ優しく、寛容であること。どうやら課題は山のようにある。

動物たちを見よう、彼らは何も生産的な活動をしていなくても、生きている瞬間、瞬間において満たされているように思う。生きるとは本来、ただ生きているだけで満たされているという状態ではないだろうか。生きるということに、価値も、意味も、比較もいらない。まずは今、満たされていると感じること、自然な状態を感じるのだ。これこそが活動に対する存在の優位であり、この基盤を持たない活動はすべて虚しい。まずは今を楽しもう。それが寝たきりであっても、介護を受けている状態であってもかまわない。自然でありさえすれば、狂った価値観に汚染されていなければ、それは常に可能だ。今という瞬間には再現性がない。今ここを生きる。今ここに喜びを感じる。それが活動に対する存在の優位。

(2013年7月)

## 2013-07-02 15 . 世界経済の大潮流

私の信頼するエコノミスト水野和夫氏の最新刊「世界経済の大潮流」を読んだ。(2012年5月)以下は簡単な読書メモである。

### 利子率革命

2%以下の超低金利が長期間続く状態になると「利子率革命」と呼ばれる現象が起こると水野氏は指摘する。このような状態は人類史上3回しかない。1回目が、アウグストゥス帝政時代のローマ。2回目が16世紀初頭のイタリア、そして3回目が、1997年以降の日本だ。利子率革命が意味するところは、大きな歴史の断絶である。ケインズはこの状態になると社会変革が起こり利子生活者は安楽死すると、つまり資本家の時代は終わると予見した。しかし、現実は違った。金融工学が発達し、金融派生商品(デリバティブ)が生まれ、サイバー経済という空間が生まれた。これはアメリカの錬金術だと水野氏は言う。リーマンショック後も、この怪物は生き続けている。

### 没落する中産階級

グローバル化で起こっていることは、新興国と先進国の平均化だ。新興国では生活は向上し、先進国の生活は悪化する。そして、サイバー経済の時代より前には主役だった労働力は、その座を資本に譲った。現代の主要な産業は金融なのだ。いまや、資本、国家、国民の利害の一致などあり得ない。国家もまた、ご存じの通り資本の使用人になっている。賢明な若者が夢を見ないのと同じく、賢明な中産階級は今より良い明日など無いと知るべきだろう。

### デフレ脱却には円高

水野氏の、日本の現在のデフレに対する処方箋は単純明快だ。日銀が金利を上げて円高にし、石油を安く買えるようにすれば良いと言う。しかし、国際政治の力学が働くだろうから実現性には疑問符がつく。本当に強い日本になれない事情については、ここに書くまでもあるまい。(アメリカによる支配下にあるということ)

### 脱成長と定常化社会



成長という目標は、経済活動に秩序とエネルギーを与える装置だと  
える。脱成長は、それに替わる理念ではなく、ただの否定形だ。水野氏  
は見田氏の影響からか定常化社会という結論に至るのだが、言葉はとも  
かく、なかなかイメージできない姿だとも思う。それよりも悪化する生  
活の中で切り捨てられそうなマイノリティを救う思想が欲しい。それは  
「観念ではない、近くの他者への寛容」だ。リベラリストの最大の敵が不  
寛容であることは言うまでもない。

現在進行中の資本主義の歴史的大変革は長く続く。2012年の今、  
新しいシステムの姿を経験する人はいないだろう。いずれにしても、過  
去の常識や価値観が崩壊中であることは間違いない。そういうものに惑  
わされたり、しがみついたりすることなく、それぞれが確固たる姿勢を  
持って行動することが重要だろう。

(2012年5月)

これを書いたのが去年の5月だ。安倍政権が誕生し、今の話題はアベ  
ノミクス一色だ。アベノミクスでは、水野氏の円高戦略とは真逆の円安  
政策によってデフレから脱却する考えらしいが、果たしてどうなること  
か。アベノミクスは、石油価格や輸入品価格の上昇というコストアップ  
からなるデフレ脱却であり、需要を創出し国民所得を向上させることに  
よるデフレ脱却とはまるで性質が違う。マスメディアも大衆も、円安を  
歓迎し株価の上昇に喜んでいるようだが、もう私には語る元気もない。  
あ、こうして語っているのか？(笑)

(2013年7月)

## 2013-07-03 16 . SNSの光と影

SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）は、すっかり一般化した。今では中高年でもスマートフォンを使って facebook をしている。それはまるで新しい通信・コミュニケーションの標準であるかのようだ。一方、業界ではソーシャル・メディア・マーケティングだと騒いでいる。あるいは、ソーシャル・メディアが権力構造に変化を与えると見る社会学者もいる。中には権力構造が階層型からネットワーク型になって流動化するのだとも言われた。誰もが対等に意見を述べることで議論の質が上がるとか、新しい民主主義が生まれると想像した学者もいる。はて、本当だろうか。

とんでもない。そこにはスケールフリーという法則が働いて、富める者がますます富むという構造が出来になっている。「私は facebook を使いこなしているし、友達もたくさんいる」などと浮かれている人もいるだろう。重要なのは、友達の数などではない。どういうネットワークのどういう位置にいるのかが重要だ。友達を増やして頑張るとするのは「おちこぼれ相手の互助会ビジネス」の最下層に仲間入りしたということかもしれないのだ。参加すべきネットワーク、つながるべき相手を慎重に選ばなければ、とんでもない落とし穴が待っている。もしも貴方がコミュニティに圧力を感じるならば、すぐにそのコミュニティを離れるべき。

ソーシャルメディアの最大の欠点は、情報の断片化、コミュニティの断片化だと私は考えている。SNSでは好まない情報を容易に遮断できる。そして、限られたコミュニティの中だけがその人の情報環境となる。それぞれのコミュニティで常識が逆転していることも珍しくはない。私たちは意識して「冗長な関係に埋もれたり、重すぎる関係になること」を避ける必要がある。最近では「つながり」という言葉が多用されているが、「つながり」を増やすことは売上や利益の増加を担保しない。それどころか、確実に時間とコスト、そしてストレスを増やす要因となる。コミュニケーションには適切な規模というものがある。それは、おおよ

そ150人だ。これをダンバー数という。友達の数を見ても自慢するのは馬鹿げたことなのだ。

さて、ここまでは1年前に書いた文章の焼き直しだ。ただ、だんだんとSNSに対する見方が変わってきた。現在の利用者のほとんどは、SNSで意見表明などしない。単にコミュニティ向けのツールとしての機能の方がメインになっている。そして、そこでは言葉よりも空気が重視される。個人が世界に発信するなどというインターネット黎明期の幻想あるいは夢といったものは無くなったと言ってもよい。そういう夢を追いかけている人は活動家と呼ばれ敬遠される。もはやSNSはコミュニティ用のツールと言えるだろう。

一方でSNSの発展は国家と企業にとってとても都合が良い。事実上、国家はすべての個人情報をデータベースで管理できるようになった。また、このビッグデータはマーケティングを生命線とする企業にとって価値が高い。より精度の高いマーケティングを低いコストで実現できるからだ。ソーシャルメディア上の情報や繋がりは、コンピュータで簡単に解析できる。利用者は分類・整理され、評価、格付けされることを受け入れなければいけない。SNSの利用者は自ら個人情報を提供し、その恩恵を受ける一方で、常に監視され管理される存在になるのだ。

SNSの利用者にとって「他者と自分の関係を正しく認識し、制御し、活用できるか」という点が重要だと識者は言う。しかし、それ以上に重要なことは、いったんアクセスし、書き込んだ、あるいは閲覧したことは、すべて監視可能であり公開情報に近いという事実だ。10年前、あなたはここにこんな事を書いた。その程度のことを調べるのは権力にとっては朝飯前のことだ。「いや、私は従順な一市民です」と油断して良いのかどうか。SNSにも光と影がある。長所と欠点がある。コミュニティの中の会話だから、と思っただけはいけない。

また、情報格差という問題もある。これはハード面だけではなくリテラシーについても言える。今では就活にfacebookが必須だという。パソコンが家にないというのは絶望的なハンディだ。かといって国が全員に

パソコンを供与するというのにも異論が出るだろう。また、持っていても使いこなせない人もいる。こうして格差は大きくなる。

さらにSNSは生活そのものを変えてしまった。多くの人がスマートフォンに浸かったような生活をしている。それを問題視する人もいるが、いったいどんな解決策があるだろう。好きならやれば良い。それとも依存症として治療の対象にしてしまうのか。考えるべきは、このSNSの使用時間の犠牲になった時間は何に使われていたのかという分析だろう。勉強だろうか、仕事だろうか、それとも・・・。

それにしてもSNSという「大いなる自由の基盤」(?)がハイパー管理システムの上で実現されているとは皮肉なものだ。利用者はこういう現実をまずは知っておかなければならない。また、SNSによって自由な討議が可能になった以上に、世論操作が簡単になったようにも思う。そして、サイバー戦争の勝者は市民ではなく資本であることがいずれ明らかになるだろう。なぜならば、資本は頭脳を買うことができるからだ。こうして民主主義は完全に資本の傘下に入った。

## 2013-07-04 17 . 言葉はどこまで自由か

考えるとき、ヒトは言葉を使う。私の場合は日本語を使う。世間では自由な発想力、そして豊かな表現力が素晴らしいこととして称賛される。私もそれを素晴らしいと思う。ところで、自由な発想、自由な思考という場合に、いったいどこまで自由なのかという限界がとても気になる。

言語、文法、単語。それれが制約になることは誰にでもわかる。また、それらは生き物であり、時代によって、あるいは地域などによって変化して行く。それだけではない。時代にはそれぞれ特有の態度というものがあり、気がつかないうちにヒトはその枠組みに沿って考える。

20世紀の思想家であるイバン・イリイチは、生産、効率、生命、システム、成長、開発といったものに価値を置くのは20世紀以降に生じた異常な考えだとして、それらを嫌悪した。キリスト教における七つの大罪が、いまでは七つの美德になったという人もいる。一つの時代を生きているということは、その時代に特有の態度を共有するということだ。少なくとも一般人はそれに適応することで生きて行くのである。

しかし、芸術家や思想家、哲学者といった人々は言語の枠を、そして時代の枠を超えようとする。あるいは、科学者、研究者、マーケティング、起業家なども、新し何かを求めて突き進むという点では似ているかもしれない。求めているのは、新しい概念であり、新しい文法だ。そこには、自由の限界を超えようとする運動がある。

パスカル・キニャールの「音楽への憎しみ」という本の中に、「ヴェーダの文献に見られる奇妙な計算によれば、神々の言葉に付加された人間の言葉が表現しているのは言葉全体の四分の一でしかない」と見積もられている。」という一節がある。その通りなのだと思う。私たちは現在用いていることばが十全だと思いがちだが、それこそが勘違いなのではなからうか。

ものごとを考えるときには、言葉に染みついた特有の観念に気をつけないといけな。短絡的に、自然は素晴らしい、成長は素晴らしい、成功は素晴らしい、などと決めつけてはいけな。言葉の影を見ること、

言葉の裏側を見ること、そういう姿勢を持つことで、思考力や表現力は磨かれて行く。

言葉は自由ではない。むしろ、人は言葉によって拘束されている。「勤労は美德だ」とみんなが言えば、それは正しいことだとされる。これは単純な例だが、いろいろな価値観が単純なスローガンで一色に染められていることは珍しくない。国連も、国家も、企業も、そういう言葉を開発し浸透させることに注力しているのだから。

現代ではそれらに音楽や映像が加えられて情動系に作用するように設計されている。ひとつのコンテンツを大量に、そして繰り返し与えることで、サブリミナル（潜在意識）の領域を刺激してメッセージを刷り込んで行く。そこにはもはや、言葉による自由な思考はない。メディアの発達とは、こういった洗脳技術の発達でもあるのだ。

もちろん、私自身も洗脳されている。ただ、できるだけ自由でありたいとは思いうし、どう洗脳されているのかを知りたいとも思う。そこには危険な側面もあるだろうが、思考の、そして言葉の限界を知っておくことは重要だろう。

洗脳しようとするのは権力や体制だけではない、反体制も同じことだ。「クール・ヘッド、ウォーム・ハート」という言葉がある。頭は常にクールでありたい。そうすれば、馬鹿げた言動はしないはずだ。そこにはいつも、慎みがあるのだから。

（2013年7月4日）

## 2013-08-03 1 8 . 生態人類学から見た未来予測

「ヒトはなぜヒトを食べたか」の筆者であるマーヴィン・ハリスが生態人類学の創始者なのかどうかは知らない。この本は石器時代から資本主義までを俯瞰した、詳細な研究と非凡な思考の結晶であり、発売当初は欧米でベストセラーとなった生態人類学の金字塔だという。筆者は、自由意志や道徳的選択は、社会生活の体系が進化してきた方向に対して、事実上何の重大な影響も与えてこなかったと主張する。問題なのは、再生産の圧力、生産の強化、環境資源の枯渇こそが、家族組織、財産関係、政治経済、などの進化を理解する鍵となるというのだ。本書ではこのような観点から、農耕の起源や、戦争の起源、国家の起源、資本主義の起源などが鮮やかに説明される。

筆者は自由意志による進化を否定しているのではない。そうではなく、文化の科学を無視した自由意志はナンセンスだといっているのだ。そして、現在は生産様式が限界に達し新しい生産様式がすぐに採用されなければならない時期だと筆者はいう。

繰り返す。社会生活の体系の進化に対して自由意思（思想）だけで変革を行おうとする発想は意味が無いのみならず危険である。重要なのは、再生産の圧力、生産の強化、環境資源の枯渇がどのように変化するかを予測することだ。これらの変化こそが、家族組織、財産関係、政治経済、などの進化を決定する鍵となる。

最近ではBOP（ピラミッドの底辺、貧困層市場）が注目されている。エコノミストの水野和夫氏は、もはや地球上から搾取できる部分がなくなってしまったのだから、成長を基礎とした資本主義は終焉を迎えるだろうと言う。

おそらくその通りなのだが、重要な事は「経済成長」こそが、社会に方向性と緊張感と秩序をもたらしてきたという事実だ。これを「社会的誘引力」と呼ぶことにしよう。

現代文明は、ひとことで言うと「過剰」である。もはや生産を強化する必要性はない。それどころか、働けば働くほどインプットは増え、収

穫は遞減し生産性が低下する。

従来は、供給を増やせば必然的に需要がそれを追いかけた。しかし、現在の世界は違う。より重要なことは、生産性を上げるのではなく、いかに「分配」すれば良いのかという考え方やルール、制度を確立することにある。

一つにはワークシェアリングと言う考え方があるが、それが可能なのは賃金の低い単純労働だろうから、相対的貧困と格差という問題が発生する。それ以上に、さらなる技術革新は、ワークシェアリングの対象となる労働のパイをシュリンクさせることだろう。ワークシェアリングでは本質的な問題は解決できない。

フラット化した世界の中で、これからどのような変化が起こるのか。

以下、私の予測を簡単に整理してみよう。

<先進国>

1. 雇用創出という政策は成功しない。就労人口は減少する。
2. プレカリティが社会問題となる。

プレカリティ：雇用と生活の不安定な状態。

<BRICS + ネクスト・イレブン>

1. 高度経済成長の道を進む。
2. やがて（20年以内に）先進国と同じ状況に陥る。

<資源のある国>

1. 先進国との間に政治的衝突が起きる。
2. 政府系ファンドが世界を席卷し、リスク（火種）となる。

<貧困国>

1. 外国の支援に頼らない政治、経済へと舵を切る。

さて、次に対立軸を見て行こう。

1. 成果に応じた格差を容認 / 公平と平等を志向
2. 国家主義 / 世界政府志向



- 3 . グローバリズム / 反グローバリズム
  - 4 . 成長志向 / 循環志向
  - 5 . 現在志向 / 未来志向
  - 6 . 環境重視 / 経済発展重視
  - 7 . 福祉的雇用主義 / 反雇用主義 ( ベーシック・インカム等 )
  - 8 . 保守主義 / 反保守主義
- ・・・等だろうか。

豊かさの中での貧困の増加が、社会を不安定化させる事は間違いない。民主主義国家における貧困や格差の拡大は、必然的に社会主義的傾向を持つ政府へと繋がるだろう。ここで言う社会主義的傾向とは福祉国家であり、再配分の大きい、いわゆる大きい政府である。

一方で、現在の勝ち組は既得権を失いたくはない。あらゆる力を使って、既存の資本主義システム ( 特に金融 ) を維持したいだろう。そこで発案されたのが、環境ビジネスであり、BOPだ。ただ、彼らも先進国での雇用主義が限界にきていることは認識している。故に、反福祉的ベーシック・インカムを推奨して、それを究極かつ公正な「正義の福祉」だと主張するのである。これは、明らかに策略だと考えられる。

とりあえず私の思うところをまとめておこう。

- 1 . 格差社会ではなく、以下のような多極化社会になる。
  - a . 超ノマド層 ( 世界で活躍するエリート )
  - b . 自由層 ( 芸術家、個人事業主、大学教授等 )
  - c . 一般労働者 ( 被雇用者 )
  - d . 経営者 ( 個人事業主を含む )
  - e . 有閑階級 ( 資産家 )
  - f . その他 ( パラサイト、アウトサイダー等 )

これらを収入や資産で序列化したり比較することは無意味だ。生き方や考え方、価値観の問題なのだから。

- 2 . 勤労に対する態度の変化、多様化、対立

これが一番やっかいだ。働かざるもの食うべからず。福祉は悪と主張する人もいる。やりたい事 = 仕事、やらされる事 = 労働、という二分法もある。働き過ぎを美德とする人がいる。一方で、労働は1日4時間以内が適正だという人もいる。

最も大きな政治的、経済的対立軸は、ここだろう。

### 3 . 新しい誘因力

私は「経済成長」に代わる「新しい社会的誘因力」について、長年にわたり考えてきた。いや、正しくは考えあぐねてきた。そして、ここに来て少し光が見えてきたように思う。それは、新しいコミュニティの創出と自立だ。もはや、政府や大企業に頼ることは出来ないという覚悟。それは、家族や地域だけではない、まったく別種のコミュニティになるように思われる。例えば、webでの出会いがネットワークになり、ハウスシェアリングがはじまり、そういう地域が出てくるかもしれない。家族を核とした世帯という概念は時代遅れなものとなる。そして、新しいライフスタイルが生まれるだろう。

新しいスタイルの生産様式、生活様式を統導する思想は何だろうか。ひとことで言えば「(コミュニティ単位での)自立循環」だ。そして、複数のコミュニティを繋ぐ新しいネットワークだ。

やがて政府はこう宣言するだろう。「政府に頼るな。コミュニティを創り、自立せよ。」(笑)

## 2013-08-04 19 . 進化経済学の視座

「経済変動の進化理論」(慶應大学出版会、2007)という「進化経済学」の入門書を読んだ。以下はその簡単なメモである。

経済学を「進化理論」として捉えることの必要性とは何なのか。それは、正統派経済学における経済変動の取り扱いが不適切であるということだ。正統派経済学の教義は、利潤の最大化と均衡にあると言えるが、その仮定が問題に満ちていることは誰もが知っている。現在の日本の大学における教養としての経済学講義は公務員試験対策に過ぎず、学問的にはほとんど価値がないというのが実態なのだが、そのような経済学が正統派とされ一般社会で「カ」を持っているということもまた事実である。

本書では、進化理論の必要性から、現在の正統派の経済理論を再検討するとともに、いろいろな成長理論についての検討がなされて行く。ここで重要なファクターとなるのは、技術変化であり、イノベーションだ。この考え方は、シュンペーター的なものであり、第5部では、シュンペーター的競争に関する考察にあてられている。(シュンペーターの経済学は進化経済学の系譜の中で重要な位置を占めている)

第6部は、第15章「進化理論的視点による規範的経済学」と、第16章「公共政策の進化と理論の役割」から成る。本書の真の独自性が現れているのは、この第6部だろう。厚生経済学は、異なる二つの目を持つ。一つは資源配分の選択であり、もう一つが組織に関する問題だ。配分問題は最適化という言葉で定式化されるが、アローとハーンによれば、以下のような証明になってしまう。

配分と分配の問題として定義された経済問題に対して、次のような仮定をおいてみよう。選好と生産の集合は凸性であり、また、すべての財は私有され、完全な契約がコストなしで締結されかつ守られる。そして民間企業は利潤を、民間の家計は効用を、正しく計算して最大化できる。これらの仮定のもとで、現在の厚生経済学の二つの定理が得

られる。

いかなる競争的な均衡もパレート最適であり、いかなるパレート最適な配分も適切な所得移転を行えば競争的均衡として達成される。( p . 4 1 1 )

ここで注意すべき点は、配分の議論と、組織の議論という異なる領域があるということだ。核心は、競争であるとともに組織的選択であるという点に留意することが重要だと筆者は主張する。

経済学の伝統が競争の利点について抱いてきた長い関心を、現代の厚生経済学の定理とそのまま同一視するのは明らかに過剰な単純化である。( p . 4 1 6 )

そして、筆者は配分問題の本質を新しい選択肢の探索にあるとみなしている。

筆者の主張を簡単に要約すると以下の通りだ。

- 1 . 自由市場を主張する人々の議論は安易に過ぎる。
- 2 . 政府が上手く機能すれば問題は解決できるという発想は安易に過ぎる。
- 3 . 現実の複雑な問題に対し、一般的な公式をあてはめることは誤りである。

言い方を変えれば、進化経済学は主流派経済学が現実の各種政策を支配することに対して警鐘を鳴らしているのである。

では、本書「経済変動の進化理論」のコンセプトは何なのだろうか。それは以下の3点だ。

- 1 . 組織のルーティンに注目すること。
- 2 . 「探索」という概念を用いて、ルーティンを評価、修正する組織行動に注目すること。
- 3 . 組織の淘汰の環境に注目すること。

重要なのは、個々の企業の運命ではなく、同一の遺伝子を持つルーティンの運命だという。このルーティンの変動こそが、経済変動であり、経済進化の本質なのである。

現在、世界中で加速度的に経済変動が起きている。それはまさに、現在が経済進化の時期、経済進化の最中であることを示している。しかし、この経済進化が何をもたらし、世界がどう変わるのかについては誰もそれを知らない。それとも、世界の支配階級は、すでに何かを計画しているのだろうか？

## 2013-08-05 20 . 国家と雇用そして勤労の地平線

国家の伝統的な役割の一つに国民を食べさせること、近代以降は特に労働の機会を提供することがある。そのために雇用を確保するとともに国民には勤労の義務を課す。お金が必要で、働く機会があるのであれば働きなさいという訳だ。そして、国民の側もまた、政府に雇用機会を要求し、賃金水準などの労働条件や労働環境の改善を要求する。あたかも当然の考え方のようなのだが、私はこの考え方自体を見直すべきだと考えているのである。

生産性の飛躍的な向上期には経済成長という余地があった。経済成長によって誰もが豊かになり、幸福が増すと考えられていた。しかし、この「成長期」は歴史的に見るならば特殊な時期だったのだ。今は先進国の経済成長はグローバル化によって途上国の成長余地を食べることによってしか実現しない。途上国は確実に成長するだろうが、そこには深刻な環境問題や石油資源、食糧資源などの問題が横たわっている。中国やインドなどの大国が欧米先進国のような消費社会になることは、趨勢であるとともに脅威なのだ。

このような世界経済の中であって、国家間の競争に勝つことが重要だとする従来の発想は役に立たなくなっている。一つには、コーポラティズムという言葉に象徴されるように、政治が多国籍企業に支配されているという現実がある。そしてもう一つが、成長することで自らの生存基盤を毀損しているという事実である。

私たちは今、働くことで賃金を得て生活するということが普通の生き方だとする常識を疑う必要があるのではないのか。というのも、現在の先進国で政府が雇用を創出することは困難であると共に意味がないように思われるのだ。従来の考え方で政策を展開した結果が、労働条件の悪化、格差の拡大と貧困の増加、さらには定年延長や生涯現役でなければ生きて行けないという悪い状況を招いていると考えられる。

今の日本は需要不足に悩まされていると近代経済学の信者は言う。しかし、需要不足を問題視するのは「経済成長」というスローガンを絶対

視しているからであって、近代経済学という信仰を持たない私にとっては供給不足よりずっと良い状態だ。

ネオリベリズムの思想が支配している現代のグローバル社会は、目的そのものを見失い、巨大資本の支配下にあるメディアによって未だに「成長」を是とすることで自らの権力を維持、拡大しようとしているだけではないのか。

近代化によって、私たちは地域社会や家族という第一次集団を脆弱化されるとともに、個としての自立という言葉のもとに、どんどんと社会の中で孤立してしまう人を増やしている。私はこのような現状の中で、政府は雇用の責任を放棄するとともに、国民に対する勤労の義務も解除することが望ましいと考える。

では、お金のない人はどうするのか。それには社会保障なり、ベーシックインカムなりの制度で対応すれば良い。財源は国債で賄えば良い。今も日本では、あれだけの財源を国債で賄っているのだ。その使い道を変えれば良いだけの話だ。今の日本は富の再配分が上手く行っていない。今考えるべきことは、生産や成長ではなく、再配分のシステムを民主的な手段で変更することなのである。

もっとも、このようなシステムを実現するのは政治より前に市民の意識だ。政府に雇用を期待しないこと。勤労を美徳と考えないこと。社会システムに支えられて生きることを屈辱だなどと考えないこと。違法な労働条件のもとで無理な労働をすることは悪徳だと理解すること。つまり、新しい雇用と社会についてのビジョンを誰かが打ちだし、それに共鳴する人が増えなければいけない。

高額納税者も生活保護受給者も、等しく制度によって支えられた存在である。威張るものでも、恥ずかしがることでも無いだろう。世の中には強者もいれば弱者もいる。社会が強者と弱者の戦いになるならば普通は強者が勝つ。そうではなく、誰もが納得できる経済的、社会的ビジョンが示される必要があるのだ。

(2013年4月14日)

## 2013-08-06 21 . 道化師の不在

いよいよ「カオスなコラム21」も、これが最後の記事だ。最後は道化師。私は20代で会社に入ったころ「土俵際の道化師」を自認していた。上司に平気で反抗して笑いをとること。それが私の喜びだった。実際に、お前はいま土俵際だぞ、と言った上司もいた。そんなことは分かっていた。それでも私には自信があったのだ。後悔などない。いったい後悔することに何のメリットがあるのか。反省と後悔は異なる。嘆きに美学的な価値を見出すならば、それは個人の趣味の問題だ。前置きはこのへんにして本題に入る。

中世ヨーロッパの宮廷には道化師がいた。いまも国王の宮殿には道化師がいるかもしれないが、それは秘密とされるのだろう。中世ヨーロッパの宮廷には占い師がいた。いまも国王の宮殿には占い師がいるかもしれないが、それは秘密とされるのだろう。

タロットカードのゼロ番は愚者 = 道化師だ。ウエイト版では崖の先端に立つ少年と、そこが危険であることを告げる犬が描かれている。無邪気であること。それは道化師の本性の一つだ。以前、私はこんな小文を書いた。

愚者とは何か。それは常に世界の外部に置かれる者、そして世界を知る者のことだ。あらゆる権力、あらゆる権威にとって、それは脅威であり邪魔者だ。愚者は道化という手法を用い笑いを味方にする。愚者はその霊的な力で真実を見抜く。そして無邪気に真実を語る。

賢者は世俗に服従し真実を語らない。いや、賢者とは真実を見ようとはしない者のことだ。愚者は見る。いまや喪失の危機に瀕している「見るという行為の力」を発揮する。愚者は自由に想像し、創造する。愚者は悲しい世界の中で、まだ見ぬ愚者を求めて旅する。

近代合理主義によって失われたもの。その最大なものが「想像力」なのではないのか。小人も妖精もフィクションとされ、宇宙の万物が科学によって説明できるという教義が世界を席卷している。この考えかた自



体が科学ではなく宗教なのだが、意外なことにそれを理解している知識人すら少数派なのだ。私たちはある意味で悲しい時代を生きているのではないのか。豊かさという線分に矮小化された価値という妄想に獲りつかれているのではないだろうか。

宮廷道化師は真実を語ることを許されていた。王を笑わせることはもちろん、王を笑うこともまた許されていたのだ。王は賢明だったのだ。自らが完全ではないことを知っていたのだ。そしてまた、自らを笑うだけの余裕があったのだ。

果たして現代のリーダーたちに、道化師を許容するだけの器量があるだろうか。合理主義の外側にある想像力を楽しむ力があるだろうか。

「お笑い」という世界がある。しかし、いまの日本の「お笑い」はメディアという権力に支配され、いくつものタブーを持ってしまった。そこには道化師がいない。芸人は権力構造の一部となり自由がない。これは一般市民にとって不幸だけでなく、権力や権威にとってのリスクでもある。つまり、自らの過ちに気がつくことがないということだ。

今の時代に道化師として生きることは命懸けだ。私も二十代の頃は土俵際の道化師などと嘯いていたが、いまは道化師ではない。ただの愚者であり、誰も笑ってくれなくなった。

道化師の不在。それは人間社会の危機を意味している。わけのわからない電波や化学物質や磁気といった科学の進歩の影響は地球環境に、そして人間自身に及んでいる。近代合理主義。その爪痕が道化師の絶滅だ。なにも神秘主義で行こうという話をしてしているのではない。そうではなく、科学が絶対で万能だという洗脳を解く方策を探しているのである。世界は道化師を待ち望んでいる。

## 2013-09-02 おわりに ( プラス )

いったい何度、この「おわりに」を書き直しただろう。これで最後だと決めて、また書き直す。

5月にコラムを整理して小冊子を作ろうとしたとき、ブログの読者である友人からアドバイスもらった。「せっかく面白いことを書いているのに、書き方が下手過ぎます。いまのコラムのスタイルを好むのは高級官僚くらいですよ。もっと分かりやすく無駄を省いて書き直し、読者を増やすことを考えてはどうですか。なんなら私が添削しますよ」この時から友人のあだ名は「編集長」となった。

ありがたい申し出を受けて新たな作業がスタートしたのだが、本当に良いものができたのかどうか。それは読者諸賢にご判断いただきたいところだ。

いろいろと迷った末に、書き終えての感想を「ショート・ショート形式」の小説にしてみた。これをもって「カオスなコラム 2 1」のエンディングとしたい。みなさまどうもありがとうございました。

「思案橋」 作：白井京月

思案橋。それは日本三大遊郭と言われた長崎県にある有名な橋。私は思案の限りを尽くし、いまここにいる。

何のために考えたのかすらハッキリとしない。ただ、考えていたかった。ずっと考えていたかった。思索はテキストとして本にまとめた。本が出来あがったとき、絶望が発生した。

私は遥か遠くを見ていた。人類の100年後、200年後を考えていた。しかし、その時には私はいない。そして、私の思索に興味を持つ人もいない。

思案橋は10メートルちょっとの短い橋だ。川は人工的に作られた水路で、限りなくゆっくりと水が流れている。夜のネオンに照らされた水はくすんだ極彩色で、そこには私の過去がそのまま呈示されているようで、悲しく、懐かしく、そしてどこことなく不快でもあった。

私は欄干に手を置いて景色を眺めていたのだが、いつのまにか橋の上で胡坐をかいていた。そして、いつのまにか目を閉じて瞑想していた。私は魚になった。私は鳥になった。私は花になった。私は虫になった。それも順にはなく、同時に。私は分裂し、一つの私ではなくなった。あれも私、これも私。そう思うと世界のすべてが私自身であるという事実に気づき眩暈がした。

いけない。意識が危険だ。このまま瞑想を続けると日常世界へ戻れなくなる。

そう思った瞬間、空が光り雷がなった。ピシャという落雷の音を合図に、激しく雨が落ちてきた。私は空気になり、分子になり、原子になった。私とは世界の、いや宇宙の総体だ。それは身体なき意識だった。神だ。俺は神になった。

もっとも神は偉大でもなんでもない。ただ存在するというだけで、意思も、意図も、善も、悪もない。それは巨大であるというだけで、多少の珍しさと驚きはあったものの、楽しいというものでもなかった。私は思案橋で瞑想しているうちに宇宙そのものになってしまった。

いや、私というのは間違いで私たちというべきだ。そして、そこには二人称も三人称もない。あなたも、彼も、彼女も、すべては私たちであり私自身なのだから。

思案橋の上で瞑想している私の周りを数人の僧侶が取り囲む。そして、手にしたセメントを私の身体に塗って行く。足、胴、手、顔。当然、呼吸はできなくなり、生物としての昔の私は死んだ。しかし、私たちは宇宙なのだ。一つの生命の死などというのは宿命であり必然なのであって、たいした問題ではない。

やがてセメントが固まると、彫刻家がやってきて、石像となった私に造形を加えて行く。その行為にどんな意味があるのかわからないが、人間というのは実に不可解なことをする動物だ。これが私の墓なのだろうか。墓を作る動物。それは生きたことの痕跡を残したいという思

い。あるいは再生の、そして復活の願い。

石像には、シアンという名前が付けられた。地元の商店街はこれを町おこしに利用しようと考え、行政もそれを支援した。石像はネット動画サイトで世界に紹介されて一躍有名になった。思案橋界隈の複雑な歴史への関心も高まり、国内はもちろん海外からも観光客が集まる話題の場所になった。そこでは誰もが記念撮影をした。石像をミニチュア化した置物は、5万円という値段にもかかわらず飛ぶように売れた。それでも私は悲しく思う。なぜならば、再びあの思案橋で雨に打たれて瞑想することが出来なくなったからだ。私だけでなく誰もが、もうあの場所で瞑想することが出来ない。なぜならば、そこには石像があり、空間は占拠されているのだから。

長崎思案橋。思案には風情が不可欠だ。思案には美学が必要だ。人を引き付ける華が、そして磁場が必要だ。あとは雷を待つだけだ。

こちらもお読みいただければ幸いです。白井京月・超短編集  
(<http://novel.fc2.com/novel.php?mode=tc&nid=153570>)



カオスなコラム 2 1 @白井京月 id:rk0520

発行者：株式会社はてな

京都府京都市中京区高宮町 206  
御池ビル 9F

<http://www.hatena.ne.jp/>

印刷：みつわ印刷株式会社

13090202rk0520